

上山高原自然再生協議会 次第

日時：平成26年3月16日（日）16:30～

場所：上山高原ふるさと館

1 開会

2 あいさつ（協議会会長）

3 議事

(1)平成25年度自然再生協議会情報連絡会議について（報告）

(2)自然再生基本方針の見直しについて

(3)その他

4 閉会

<配布資料>

- 上山高原自然再生協議会資料
- 上山高原自然再生協議会設置要綱

平成25年度 上山高原自然再生協議会 会議録

1 日 時

平成26年3月16日（日） 16:30～17:30

2 場 所

上山高原ふるさと館

3 内 容

(1) 平成25年度自然再生事業実施円滑化会議について

- ・ 岩手県で11月27・28日に開催された平成25年度自然再生事業実施円滑化会議（自然再生協議会情報連絡会議）の報告を資料1により説明。

(2) 自然再生基本方針の見直しについて

国において検討されている自然再生基本方針の見直しについて資料2により説明。

① 自然再生実施計画について

- ・ この協議会で「上山高原自然再生全体構想」を平成25年3月に策定し、自然再生実施者としてNPO法人上山高原エコミュージアム、新温泉町、兵庫県の3者で「上山高原自然再生事業実施計画」を平成24年1月に策定した。

これとは別に国の交付金を受けるため自然再生整備計画があり、H22年度～26年度の5年間の計画を作成している。これに基づき自然環境整備交付金の交付を受けているが、H27年度から新たな5年間の「自然再生整備計画」を策定する必要がある。

この協議会で策定した「上山高原自然再生事業実施計画」との整合性を図る必要もあり、「自然再生整備計画」の策定と合わせて、「上山高原自然再生事業実施計画」を見直す必要がある。本協議会は、毎年、年度末のこの時期に開催しているが、平成26年度は、年度中に開催し実施計画に対する意見交換等行う必要があると考える。

- ・ 「自然再生しますよ。」「自然環境を保全しましょう。」だけではダメだと思う。自然を守ることによって、「こんな恩恵がありますよ。」という切り口でないと人が動かないのではないか。自然を保全することでのメリットをふくらまし、アピールする。特に環境学習では、そういう部分に力を入れることが必要だと思う。

② 自然再生について

- ・ 先程のモニタリング報告会で、武田先生が刈った草の放置が良くないと報告されていたが、昔は牛の餌として活用していたようだが、今、活用することは無理

なのか。

- 但馬牛は、この地域に豊富な草種があることで、それによって育てられていると聞く。1㎡あたり39種もの草があってそれを食べて良い牛になる。今、上山高原で刈った草はせいぜい10種くらいではないか。

また、刈ったり、天日干しするのは非常に手間がかかる。農家は皆エサを購入する方が楽なため、上山高原にも人の手が入らなくなった。

- 仮に、上山で草を刈り取って、干して、集落に持って来れば購入する農家はあるか、また、いくらくらいなら購入するのか。
- 1キロ50円くらいではないか。
- 研究してみる価値はある。
- イヌワシの状況が良くないとの報告があった。上山の自然再生の方向で何か必要なことはないか。
- 今の草原管理の面積では少ない。イヌワシは草原の鳥。かつては、人の手の入った草原があちらこちらに沢山あった。上山にも国有林があるが国に対して皆伐して欲しいと意見はしている。部分的な間伐ではイヌワシにとってあまり意味がない。狩り場となる草原が必要。
- 日本のイヌワシは、2匹のヒナが生まれ、後から生まれたヒナは、先に生まれたヒナに殺され食べられる。アメリカやモンゴルのイヌワシはそんなことはしない。日本だけ。なぜかという、エサが少ないからだ。日本は森林の国なので、イヌワシに適した環境にはない。

県内での繁殖は期待ができない。ただ、イヌワシの幼鳥の活動範囲は非常に広い。営巣できる環境をつくれれば定着する可能性はある。奈良県では、30数年定着していなかった営巣地があったが、なぜか定着した。要因は特定できないが環境の変化があったものと考えている。

- 草原管理では、火入れが効果的と考えている。保安林内では火入れができないが、法的に無理なのは理解しているが、特区を適用してできるようにならないか。
- 豊岡ではコウノトリをシンボルとして環境づくり、環境配慮の農業など取組が進んでいるが、この上山高原の自然再生で参考になることはないか。
- コウノトリを守っている人ばかりではない。先程もお話したが、コウノトリ守るだけでは人は動かない。コウノトリもいる環境は良いと、地域住民が考えるようになってきている。コウノトリ米がそうだし、コウノトリが住んでいる地域の無農薬のお米、値段は高いがブランドとして受け入れられている。自然保護の先にあるもの、地域の住民がコウノトリとの共生に対し、地域全体がコウノトリだから仕方がないかなといった雰囲気になることが必要。
- イヌワシでは繁殖は無理。動物園でイヌワシを繁殖させることは可能だが、それを自然界に復帰させることは相当難しい。コウノトリのようにはいかない。昔、

2羽生まれたイヌワシのヒナをなんとか1羽取り出して、別の巣で育たないか試したが、たまたま先天性の病気で死んでしまったという例もある。

③ 人材育成について

- 後継者の話もあったが、この奥八田地区も相当な高齢化。自然再生も人材面で非常に厳しい状況になる。何か考えず、魅力ある地域づくりをしないと人も定着しない。
- 自然再生基本方針の見直しにも人材について書かれている。全国の自然再生協議会でも7割が10年後には活動ができていないだろうと。どこも高齢化を迎える中、次世代育成がなかなか進まない。

だから学校教育と連携した環境学習も重要なものと位置づけている。小さいうちから地域の自然に慣れ親しむことで、担い手の育成になる。単純なことではないが、地道な活動を続けるしかない。